

日本学術会議

会長 光石 衛 様

令和5年11月17日

古関東深海盆ジオパーク推進協議会

日本学術会議が係わる国際的な研究不正への対応の再々度のお願い

暮秋の候、貴会に於かれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

2020年1月15日に、国際地質科学連合(IUGS)により地質年代「チバニアン」が決定されました。しかし、申請グループの論文に対し、「捏造・改ざん」が疑われる図表が複数の論文に見られたため、古関東深海盆ジオパーク推進協議会（以下「本協議会」）は、正しい図表データで論文を書き直し、それに基づき提案申請書も出し直した上で国際地質科学連合による審査もやり直すべきであることを提唱しております。

各論文の不正を疑う箇所、および不正を疑う根拠につきましては、当協議会のホームページ (<https://www.paleokantogeo.org/post-3483/>) に示しております。

また、不正を疑う箇所の一例は、下記リンクの図

(<https://www.paleokantogeo.org/wp-content/uploads/simonetal2019.jpg>) になります。

「チバニアン」と貴会の関わりにつきましては、2018年5月16日に貴会地球惑星科学委員会 IUGS 分科会（以下「分科会」）が「科学的にも問題ない」として、国際地質科学連合へサポートレターを提出しております。

(<https://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/bunya/chikyu/pdf/iugs-yoshi2402.pdf>)

そして申請グループは、分科会のサポートレターが地質年代「チバニアン」決定の決め手になった、と表明しております。

そこで、本協議会は2019年4月12日、2020年1月11日および1月30日に分科会に宛てて論文の問題点と質問事項を記載した文書を送付しましたが、分科会からの回答はありませんでした。

- ・2019年4月12日文書：<https://www.paleokantogeo.org/chibasection-opinion-sciencecouncilofjapan-2019-02-25/>
- ・2020年1月11日文書：<https://www.paleokantogeo.org/post-2498/>
- ・2020年1月30日文書：<https://www.paleokantogeo.org/chibasection-opinion-of-chibanian-for-scj-2020-02-03/>

分科会から回答が無いため、貴会前会長である梶田隆章氏に宛てて、本協議会の文書に対して分科会が真摯に対応して頂く様、要望する文書を2020年12月23日および2021年8月5日に、それぞれ送付いたしました。

- ・2020年12月23日文書：<https://www.paleokantogeo.org/wp-content/uploads/2020/12/gakujututegami.pdf>
- ・2021年8月5日文書：<https://www.paleokantogeo.org/wp-content/uploads/2021/08/gakujututegami2.pdf>

ところが、梶田氏からも回答はありませんでした。

「科学者の代表機関」である貴会が、「科学的にも問題ない」とした論文に対して議論を避けてしまう事態は「科学の発展を阻害するもの」に他ならないと思慮されます。また、本年4月27日には梶田氏自ら「学術の発展とより良い役割発揮のために、広く関係者を交えた開かれた協議の場を」というメッセージを発信されておりますが、科学的な問題に対する「開かれた協議の場」を、これまでご提供頂けなかった事につきましても、大変残念に思います。

分科会メンバーは、「科学的にも問題ない」との文書を国際地質科学連合に宛てて提出した2018年当時から多少の入れ替わりがありますが、大半は現在も在籍されております。

また、本協議会が研究不正を疑う論文の著者（および共著者）の方も、地球惑星科学委員会の他の小委員会に在籍されております。

以上を踏まえて、本協議会は以下の3点を貴会に改めて要望いたします。

- 1) 分科会（第24期・第2回）の議事録には「Chibanianの提案に国内組織から異議が提出されたことに関して、現在の状況を把握するため申請グループの説明を受けた。」とあるが、この申請グループの説明の内容を公表すること。
- 2) 上記1)に関して、分科会は「科学的にも問題がないことを確認することができた」としているが、どの様に論文を確認したのかを公表すること。
(後日、本協議会が論文を読むと複数の論文の図表に不正を疑う点が発覚したため)
- 3) 論文の不正が疑われる箇所を研究機関に告発したところ、茨城大学からは「[結論に影響しないため不正ではない](#)」、国立極地研究所（情報・システム研究機構）からは「[掲載済みの論文に対する不正の疑いは学術誌の編集委員会の責任において行われるべき](#)」との回答を頂き、調査の実施を否定されたが、これら研究機関の予備調査について、貴会としての見解を賜りたい。

永岡桂子前文部科学大臣により、査読に関する対応指針を作るための審議を貴会に依頼された事が複数のメディアで報じられ、本年9月25日に貴会のホームページにおいて『回答「論文の査読に関する審議について」』として回答が公開されております。

その中には、『「研究インテグリティに関する、国内外の現状調査、課題の整理、今後の対応方策に関する検討」を挙げている。』とあります（本文1ページ目）。

上記要望事項1)、2)、3)につきましても、貴会が考える「研究インテグリティ」と比較して妥当なものかどうか、見解を賜ることが出来れば幸甚です。

なお、本文書につきましても前回・前々回文書と同様に、本協議会のホームページ (<https://www.paleokantogeo.org/>) で公開させていただきます。

ご不明な点等ございましたら kokantoshinkaibon@gmail.com までご連絡頂きます様
よろしくお願いたします。

以上